

「ぶんぶんひろば」における授業の実践
「家庭支援論」
(短期大学 保育学科)

1 「家庭支援論」について

平成13(2001)年より、保育士は「児童の保育および児童の保護者に対する保育に関する指導(保育指導)を行う」専門職として児童福祉法に位置づけられた。つまり、保育士は乳幼児の保育の知識・技術に加えて、子育て支援の力量を必要とされる専門職となったのである。

それに合わせ、平成14年度入学生から講じられるようになった「家族援助論」は、平成22年に「家族」から「家庭」を含めた支援体制や支援のネットワークが重要視されるようになり、「児童家庭福祉」「社会的養護」等の科目との関連を踏まえ、「家庭支援論」となった。

2 「ぶんぶんひろば」実践の意義

本学で保育を学ぶ学生(大学・学芸学部子ども学科;短期大学保育学科)は、乳幼児・児童のことを講義や演習で学ぶ学科にあっても、実習以外に乳幼児や児童と接する機会は少ない。また、保護者と会話する機会はほとんど無いのが実状である。「家庭支援論」は講義系の科目であるが、15回の講義の内、1回を「ぶんぶんひろば実践」とし、募集に応じてくれた家族へのインタビューの時間としている。学生、保護者(多くの場合母親)の双方にとって、意義のある時間となっている。

3 実践の方法

学生が4~5名の班に分かれ、「子育て中のお母さんに聞きたいこと」を話合う。各班5個程度の質問を用意する。1班の内、半数の学生が15分間インタビューを行い、半数は子どもと遊ぶ。後半の15分は班内で役割りを交代する。ぶんぶんひろば実践は「実習」に準ずる扱いとし、挨拶、服装、立ち居振る舞い、個人情報守秘の意識(実践前に「個人情報保護に関する誓約書」に署名するよう指導し、注意を喚起している)等に留意するように指導している。2012年度は7月31日(火)の3コマ、4コマ目に行った。



インタビュー風景

4 学生のコメント

ほとんどの学生は、感想に「子育て中の保護者と言葉を交わしたのは初めて」と書き、「このような体験ができてよかった」と書いている。学生のコメントを整理してみる。

(1) 全体的感想

- ・実際の話を聞くことができ、よかった。
 - ・子どもを育てることの大変さがよく分かった。
- この2件が、毎年、20~30件と最多である。

(2) 「母親」への感想

- ・母親の子どもへの気配りがすごい。
- ・母親によって、考え方の違いもあった。
- ・時間が欲しいという意見が多かった。
- ・周りに知り合いがいないという人もあった(それゆえに、このひろばが有り難いとのこと)。

(3) 「子ども」への感想

- ・かわいくて、癒された。
- ・人見知りの個人差に気づいた。
- ・子どもにも個性があると分かった。

(4) 「ぶんぶんひろばを利用する理由」の理解

- ・実家から離れ、周りに知り合いがいないので助かっている。
- ・家での遊びだけでは行き詰る。新しい遊びができ、子どものストレスが解消されるから。
- ・友達もできるし、良いおもちゃもあるから。

5 まとめ

学生たちは、母親の子どもへの関わりをみて、保育士になるために役立つ、親になったとき役立つなど、それぞれ感想を述べている。また、保護者は学生の役に立てて嬉しいとのこと。この実践は貴重な体験の場となっている。

(文責:短期大学 保育学科 田頭 伸子)